

# 委員会レポート

委員会活動として閉会中に行った所管事務調査の内容を、各常任委員会は第5回定例会において報告しました。

※内容は要約されています。報告書の全文はホームページでご覧になれます。

## 総務産業常任委員会 調査報告

### 農業の担い手確保について

調査日 令和7年7月29日  
令和7年8月20日

令和7年8月20日

本町を支える基幹産業である農業においては、人口減少や少子高齢化の進行などによる担い手・労働力不足が課題となっている。本委員会では、町農林課、十勝清水町農業協同組合（以下、農協）、学識経験者（清水町農業サポートセンター元マネージャー）から説明を受けて調査を実施した。

調査結果を踏まえると、清水町の農業を持続可能にするためには、町と農協、関係団体がより連携し、具体的な行動計画を立てていくことが不可欠であることをまず指摘したい。そのためには、町と農協、関係団体がそれぞれの役割を明確にした中で、課題を共有し、

解決に向け連携を強化することが重要である。

町（役場と農業委員会）の役割としては、連携におけるリーダーシップが強く求められるほか、農地、環境問題、地域振興を主な担当とし、遊休農地の発生を抑制するため、就農者への情報提供や相談対応を強化することが挙げられる。農協の役割としては、生産量、販売能力、営農指導に重点を置き、就農希望者への中長期的な計画サポートやコミュニティづくりを支援することが求められている。これに普及センターを含めた総合的な支援組織を構築し、町全体で農業を支える体制を築くことが重要であ

る。

それらを基本に新たな担い手確保に向けた具体的な施策として、①多様な就農モデルとして、大規模農業だけでなく、小規模から始められる施設園芸作物の支援、②個々の経営者の考え方を尊重しつつ、地域の複数戸法人の設立を展望した多様な選択肢の提供、③大型機械やドローンとい

つたスマート農業技術のさらなる導入を進め、若い世代の農業への関心を高めること、④引き続き帯広畜産大学など産学の連携をより深めることなどが有効な手段となるのではないかな。

また、花嫁対策としては、既存の婚活イベントへの助成だけでなく、若い世代が交流できる機会を増やすための新たな



新規就農者激励会の様子

取り組みを検討する必要がある。

持続可能な農業に向けては、循環型農業の推進が求められており、畜産経営の大型化に伴う飼料・肥料確保や家畜糞尿の問題に対し、広域的な耕畜連携を推進する必要がある。そのためには、酪農と畑作が更に連携して、持続可能な農業へと変え、多角的な農業経営を推進していくことが必要であろう。

最後に、清水町の農業は、生産者が主体的な経営をし営農類型に富んでいるという特徴がある。清水町の農業を未来につなぐためには、そのような特徴を生かしつつ、役場が中心となり関係機関との連携を強化し、長期的な視点に立った具体的な行動計画を策定しながら実行に移していくことが何よりも重要であることを再度申し添えて、所管事務調査の報告とする。

# 高等学校の振興策について

調査日 令和7年7月14日～15日

清水高等学校の振興策を検討するにあたり、道立から町村立へ転換した事例や、総合学科・専門学科として地域と連携した特色ある教育を展開



大空高等学校にて説明を受ける

ぶ美術工芸高等学校を視察調査した。

今回の視察から明確になったのは、学校の魅力は単なる経済的支援や生活インフラの整備だけで作られるものではないということである。一定の支援は必要不可欠な基盤であるが、最も重要なのは、「そこで何を学べるのか」という教育の質をどれだけ明確に示すことができるかどうかであり、本町でいえば、「清水高等学校でどのような学びを提供できるか」である。

清水高等学校の大きな強みのひとつは、言うまでもなく全国屈指のアイスホッケー部である。これを単に「強豪校で競技を続けられる場」として提示するだけでなく、スポーツを学問やキャリアに繋げる学びの資源として位置付けることも重要である。加えて、本町には農業や食資源、自然

環境などの強みがある。

これらも単に教育カリキュラムのなかの活動や体験だけにとどめるのではなく、農業の6次産業化やフードロス、環境保全、観光学習といった複合的な学びを設計することで、清水高等学校ならではの独自性が一層際立つこととなる。つまり、アイスホッケーを核としながら、さらに地域資源を学びへと変換し、その魅力を全国に発信することこそ、競技に打ち込むために清水高等学校を選択した生徒にとってはもちろん、進学や就職を見据える幅広い生徒にとって「ここで学びたい」と思わせる真の魅力となり得るのである。

また、都市部では進路の選択肢が多様である一方、地方では「普通の進学」や「人と違う進路」が選ばれがちであることは否めない事実であるからこそ、調査先の



おといねっぴ美術工芸高等学校にて説明を受ける

2校のように少人数教育や生活支援施策を活かし、多様な目的・個性を持つ生徒を受け入れる環境を整えることも、現代社会に合った学校の価値だと言えることを付け加える。

今回の視察を通じ、道立高等学校としての制約がある中で、町が主体的にどのように関与できるかを整理し、清水高等学校が、「アイスホッケー

ーや地域資源を学びに変える唯一無二の高等学校」となることを強く期待する。その実現に向け、町や農協、商工会、そして地域住民と連携した学びの設計、生活支援の環境整備、そして全国への発信を総合的に進めるべきと提言する。

以上、厚生文教常任委員会の所管事務調査の報告とする。